

# 人から人へ、 途切れることなく語り伝えること



「サコロベを語る」『アイヌ風俗絵巻』（市立函館図書館蔵）

アイヌ民族が育んできた文化の一つ「口承文芸」。人から人へ、長い間、途切れることなく語り伝えられてきた。文字で書かれた文芸と違って、語り方や表現などにその人、その時ならではの味わいがある。

アイヌ口承文芸の物語には「英雄叙事詩」「神謡」「散文説話」などがある。比較的よく耳にする「ユーカーラ」という言葉は、英雄叙事詩を指す呼び名の一つ「ユカウ」から来ている。英雄叙事詩は地域によって「サコロベ」「ハウキ」などとも呼ばれているように、アイヌ口承文芸は、地域によって種類や区分、呼び方が違う。

「英雄叙事詩」には、空を飛んだり、海に潜ったり、土の中を突き進んだり出来る超人的な力を持つ少年の愛と冒険の物語など、わくわくする壮大なストーリーが多い。戦いの場面では激しい描写が繰り返され手に汗を握る。物語は長大で、数十分から数時間、短いメロディーを繰り返しながら物語の言葉をのせるようにして語られる。語り手や聞き手は、木の棒などを持って、座っている近くをたたきながら拍子を取り、物語の展開に応じては短いかけ声をかけたりもする。

アイヌの信仰では、あらゆるものに「魂」が宿っており「カムイ」と敬う。「神謡」には、動物や植物、火、水、雷、病気などの様々な「カムイ」が登場し、カムイの世界や人間の世界で体験したことを

## 平取町と白老町の取り組み

平取町に住む川上将史さんは22歳の青年。財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が開催するアイヌ語弁論大会の第7回（2003年）優勝者だ。この大会は毎年全国から約20人が参加。英雄叙事詩や神謡などそれぞれが、それぞれの節で披露する。すべて暗唱して数分を演じ上げる小学生もいる。

平取町では、北海道ウタリ協会の支部が開設しているアイヌ語教室や、町立二風谷アイヌ文化博物館が実施している学習プログラムなどで継承者の養成が図られている。川上さんも、このプログラムで初めてアイヌ口承文芸に本格的に触れ、伝承を志すようになった一人だ。

ユカウは、「まねる」という意味をもつ。川上さんは、文字には依存しないで記憶し、口伝えで受け継がれてきた文芸は、よく聴いて、覚えて、繰り返しそらんじることを基本にして習得した。大変なようでも、そのように努力することで、しっかり身につけ、味わい豊かに表現できると、自身の体験をふりかえり話す。同じように努力して、アイヌ語で物語る仲間がだんだん増えてきている。語りの文芸を聴いて楽しもうとする人、つまりファンを増やし鑑賞力を高めることも「伝え